

石濱文庫所収書簡資料に見る明治三十九年～昭和三〇年代の漢学

— その一 石田幹之助書簡を通じて —

はじめに

大阪大学総合図書館石濱文庫に収蔵される石濱純太郎宛の書簡が当時の漢学界を知るうえで大きな史料価値を有することはすでに諸方面の研究からも注目され始めている。

現在史料のデジタル化と^①公開に向けて写真撮影の作業を進めているが、今回はその一部である石田幹之助の石濱純太郎宛書簡に焦点を当てて紹介検討するものである。本稿の題名に明治三十九年～昭和三〇年代とあるのは、現在把握している全書簡資料の発送年に基づくものであり、今回は昭和二年から第二次世界大戦終了前までの昭和十九年の書簡を取り上げる。

石田幹之助の書簡に関しては夙に岡崎精郎による二本の論考^②があるが今回の調査及び撮影によって欠けている十八件を確認できた。まずは、岡崎論文で取り上げられるものと欠けている十八件

とを時系列順に並べ現在確認しうる書簡の全容を把握することから始めたい。岡崎論文で取り上げられている書簡と今回録文の対象とした書簡を一目瞭然に確認できるように最終ページに対照表を附した。その上で次に欠けている書簡の録文を記し必要な書信には考察を加える。

玄 幸子

石田幹之助の石濱純太郎宛て書簡録文

1 昭和二年七月二十二日 1467^③ 封書・抜き刷り
第四種郵便 抜き刷り「書庫の一隅より」(「民族」2/5、昭和2年7月1日) 送付

2 昭和三年一月二十一日 798 封書・青野便箋五枚

拝復 御無沙汰申し上げて相すみません。年末ヨリ年頭へかけ度、御書面を頂き又静安學社通報及び泊園書院ノ雑誌を御惠贈に預りいづれも正ニ拝收難有厚ク御礼を申し上げます。

静安學社ハ御尽力ニより非常ニ元氣ニ満ちた學術団体となりつゝ、あるように拝察します。兎角元氣を欠くやの恨みある我が斯界の為大いに心強く感ぜられます。どうぞ今後とも御奮闘を希度。小生も数ならぬもの乍ら折角社友に蒙りし上からは何とか微力を尽くし度いと考へてをります。通報も大兄一人で御編輯と遥察いたしますが違ひますか。御骨折りは並大抵の事ではあるまいと存じます。所で色々とお無沙汰のお詫び旁、御返事なり又御知らせなり致し度い事が大分たまつてをりますが、只今一寸閑を得ませんので（と申すより閑がないような気がして落ちつかぬためと申す方がいゝでせうが）とりあへず用件的の事のみ書き付けまして当面の責をふさぎます。あとは明日にも落ちつきましたら追つかけ御通信いたすことゝします。

(一) 貴社「通報」は最初一部頂戴の分を小生の分として、後に御送附下さいました四部は多分社友として特に御送り下さったものと存じ白鳥博士、和田清學士、岡下學士へ分呈いたしましたが差支ありませんか。

(二) 研究報告を御出版の由、刀江書院とも下話しがお出来になつたらしく存ぜられますが、様子によっては同書院主とは

懇意ですからなほ御命令により一層の折衝を重ねて応分の御尽力をしてもよろしう御座います。所でその第一号に何か寄稿せよとの御注文、大いによりました。文責（と申してみな小規模のものにて名もなき雑誌などに安い請け合いをした酬いなど、文庫のメモアーや東洋学報に大分前々よりの約束もあり）その未償のものもあり新規応募（といふより發行の方かも知れませんが）は見合はせ度いと思ひますが、一面貴社のメモアーに出して戴けるといふことは他の既刊のものにのせて戴くよりずっと光榮にも感じますので三月末迄に一と奮發し度いと思ひます。本日中にそのティーテルを知らせよとの事で御座いますが今どれと云つてはつきり申上げる譯に参りかねますが（いづれも起稿半になまけてそのまゝにしてあるもののみなので）先づ左のうち一つは必ず書き上げて見度いと思ひます。

(1) 『華夷譯語』に就いて

(2) 支那に於ける祓教。その流傳と盛衰に就いて。

これは嚮に「史学雑誌」にAuszugだけを（それも誤植や不備だらけのもの）載せましたが、その時の材料と、新たに増補すべきものを相当に持つてをりますのであれをdevelopさせて見度いと思つてゐるのです。それに就いて神田先生の貴社で演説されたものは大いに有りがたく拝見しました。（その事あとで一寸申し上げます）。

(3) 唐都長安に於ける胡人に就いて

就中一番可能性のあるのは(2)と考へておいていただきます。それから御手紙には英独仏魯漢何文にても可なりとありましたが日本語は無論よろしいでせうな、どうぞ愚稿などはその方と御含置を願ひます。

(三) シャヴンヌ祭に出て来いとの事。出来れば上り度いのです

が実は昨年から当方でもそのつもりで仕度をしてをりまして(それは御手紙を見てマネタわけではなく、暮れの二十何日かに^{二十一日と}_{思ひます}加藤玄智博士から一月廿九日に文庫の一

二室を明治聖經記念學會のある催しの為に借せといふ申込があつたのを、シャバンヌ記念展覽會開催の為応じ難い旨御返事したような訳なのですが)飛行機でも借して下さらない限り両方一度に顔を出すのは誠に残念ですがむつ可しいと思ひます。文庫にはシャバンヌのシグネーチュアのある本はいくつかあると思ひますが手沢本はありません、従つてこれを御望に副ひ難いのであり

(この続きは見当たらない)

【考察】

石濱純太郎は前年昭和二年九月に高橋盛孝、ニコライ・ネフスキー、浅井慧倫、笹谷良造の諸氏と静安學社を立ち上げその幹事となつており、ここで石田幹之助が受け取つたのはその創刊号「静安學社通報」第一期(一九二七年十二月三〇日発行)である。ま

石濱文庫所収書簡資料に見る明治三十九年～昭和三〇年代の漢学

た「泊園書院ノ雜誌」とあるのは石濱が黄坡とともに刊行を始めた新聞『泊園』の第一号であろう。^③ いずれも石濱を中心とする活気を帯びた研究活動が順調に軌道に乗り始めた時期であり、「今後とも御奮闘を希度」と書かした所以であろう。さらにこの書信は岡崎1983で詳細に考察されている『東洋學叢編』編纂刊行に関するごく初期の打診の状況とそれに対する石田幹之助の回答が見えて興味深い。この後紆余曲折を経て、遅延に遅延をかさねて昭和九年にようやく上梓された『東洋學叢編』に掲載された石田幹之助の論考は「至元譯語」に就いてであつた。この書信で最有力であつた「支那に於ける祇教。その流傳と盛衰に就いて」とならなかつたわけは、岡崎1983で取り上げられた昭和六年十一月十日付けの書信に「小生ノ分ハ祇教ハコレデイ、ト云フトコロ迄遭ギツケルノハ其後中々難シクナリ、一旦断念シ……」(三九二頁)とあることにより知れる。また逆に、この書簡によつて石田幹之助の論考のテーマ変更に対する言い訳と断りの理由が明らかとなる。

なお、この書信は便箋六枚目以降が同封されておらず、どこかに紛れていないか、現在搜索中である。

3 昭和十一年一月十五日 1598 封書

印刷書信 足立喜六著『考證 法顯傳』推薦書

4 昭和十二年十二月十日 1596 封書・黒野便箋三枚

拝啓、先日は御丁寧な御葉書をありがたう御座いました。

大へんおくれましたが東京大藏會の目録を一部拝呈いたします。

ことは法隆寺からもつと沢山拝借するはずでしたが、會の直前に佐伯貫主^⑤が重病に罹られ、取込んでをられたので御遠慮して文部省国宝課の尽力で諸方から借り集めて会をひらきました。

細川侯の好意でその邸内を借用いたしましたため御経よりは佛像の方が少し勝ってしまひました。

先日の拓本はあのままゆつくりお留めおき下さい。私のノートはあまりに簡単に申訳ありませんでしたが御勘弁を願います。須佐老はもう一つ珍品を送ってくれました。「満洲歴史地理」の第二巻で箭内互先生が精緻極まる攷證を試みられ、略々異論のないと思はれる遼金元の懿州の地をポジティブに立證する元の懿州南學田之碑といふものを掘り出し、その拓本を自らとって送ってくれたのです。立派によめます。それでその出土地が（もとから立っていた地と假定して）懿州の地に相違ないと思はれるのですが、残念な事に須佐氏は発見時右手の指に負傷し悪性のバチルスが入って大分手重な症状になり、今奉天の病院で切開ノ上療養中で痛む最中に左手で書いた簡単な手紙で今の何といふ村から発見したのか書き落としてあるので肝心なところが懿州になるのかはっきり申上げられません。然し最初の手紙が錦州東北阜新（義州の更に北）のスタンプが押してあり、この町から自動車で一日程以内のところらしい

ことだけは想像できます。箭内先生が今をられたらと思ひます。

「蒙古学」の第一号もやうやく校正摺を送って来ました。「盧龍塞略」の漢蒙対訳語彙を写して出しました。出た上は御批判を願います。

川瀬一馬君の大著「古活字版の研究」一部、大兄にも呈上するやう同君にたのみ快諾を得ました。目下同君は外國に寄贈の分の事勢で忙しいやうですが不日郵寄してくれること、思ひます。

一寸目録の御案内旁／＼右まで。

拝具

十二月十日（たしか二十一年前の今月今日、小生／＼南京に入城しました）

幹之助

石濱先生 侍史

【考察】

第三回東京大藏會は昭和十二年十二月五日に侯爵細川家家政所（現在の永青文庫）で開催された。開催後五日しか経過していないにもかかわらず「大へんおくれました」というのは、場合によつては目録ができ次第開催前であっても事前に送付するようなこともあったかと推測される。例年東洋文庫で開催されることも多く、石田幹之助が大きく関与していたことがみてとれる。

「先日の拓本」については詳細不明。ただ「元の懿州南學田之碑」については満鐵調査資料第一六九編として『満洲金石志稿』第一冊に「七十七 懿州城南學田之碑」（一七七頁）と著録されており、録文の後に略解として「錦州省阜新縣城ヲ距ル東北八十里ノ塔營子ニ在リ。古懿州城ノ南方ニ當ル。遼金元三史及び遼東行部志ニ見ユル懿州ノ所在ハ是ニ因テ明白ナリ。故箭内互博士ハ滿

洲歴史地理(第二卷二七五)ニ於テ懿州城ノ故址ヲ以テ今ノ彰武縣城ニ擬定セルモ之レ稍ヤ南ニ偏セルコトヲ知ル。(以下略)とあり、すでに考証済みである。昭和十一年四月二十日発行のこの資料は当時あまり流布していなかったのか、書信の内容では須佐氏が発見したものとされるが、同一碑であるとすれば録文資料のおよそ一年八か月後に再発見というのはどのような事情が考えられるのか、詳細は不明である。

5 昭和十三年十月二十一日 昭和 國際文化振興會の茶封筒に

同僚渡邊明正紹介の名刺および渡邊明正名刺、

國際文化振興會英文日本百科辭彙編纂所の白封

筒(十月二十一日消印)に印刷された執筆要綱

および押印済み正式執筆依頼書、石田幹之助書

信と別紙が同封されている。

拝呈 先日來漢學大會ノ御肝いりにて嘸かし御多忙のことであつたと遥察申上ます。生憎參加出来ませんで大へん残念でした。夏、浜田先生御葬式の日にも時が時としてオチ／＼御話を伺ふことも出来ず、久し振りにて拝顔の喜を抱き乍ら御無禮いたしこれ亦残念至極に存じます。

さて その節場所柄をも弁へず、一寸御内意を伺っておきました。小生等關係の百科辭書の為特に御援助を仰ぎ度件、改めて御願申上度いので御座いますがひとつ特前二御承引を得度いと存じ

ます。御願ひ申上ます順序として關係事項全般のプランを申上ますと、要するに

日本漢文學史 とも云ふべきもの(一)

日本儒學史 ともいふべきもの(二)

日本に於ける支那文學學習乃至研究ノ

歴史ともいふべきもの(三)

日本に於ける支那語ノ學習・教授の歴史

ともいふべきもの(四)

の四項を概説的の長文のものとし、之に配するに著名なる書物・学者・文人等ノ單獨小項目を以てするものでありまして、(一)は日本人の手に成る漢詩・漢文の変遷出来栄等を略述して頂くもので文理大の山岸往平君を煩はす事とし、(三)は嚴密には(一)と切り離せない事は山々承知ですが先づ重点の置き処を変へて青木正児先生に執筆の御承諾を得ました。(四)は明治以前を当東大の図書館ノ石崎君を煩はすこととし、明治以後は神谷衡平先生と御相談の結果文球先生に頼むこととし、昨日実ハ同僚と同道早速店頭講義を筆記して貰つて來ました。そこで第二の儒學史を部員一同の懇請と致しまして是非石濱先生に御願ひし度いといふことになったのであります。たゞ御願ひをしておき乍ら誠に御願ひしくひのは紙幅が甚少いので折角の御蘊蓄を傾けて頂くに足りない一事であります、そこがまた若い人だと大綱をコンデンスして書いて貰ふこと到底不可能なので特にご迷惑を御願ひする次第なのであり

ノ部ニテソレゾレ採録、五山緇流ノ著作中有名ナルモノハ「五山文学」ノ項中に関説、特ニ史料トシテ値打アルモノハ「國史」ノ部門ニテ採択」とある。

「○學者・文人」には「奈良・平安・漢文・詩賦ノ名家ハ山岸氏ニ採択ヲ依頼。漢學者タルモ医家・科學者乃至志士トシテ名アルモノハソノ方ノ部門ニ入レタリ。」とあつて書信の(6)の括りに藤原惺窩はじめ四一名、(7)の括りに服部南郭以下十七名挙がつている。

【考察】

この依頼はその後実現したのかどうか未詳である。その後の経緯については別稿にゆずる。

6 昭和十四年四月十五日 1600 封書・野なし便箋一枚

拝復 御葉書並ニ倫敦大英博物館本緬甸譯語寫真正ニ拝收仕り候御無事御帰坂の由大慶至極ニ奉存候 寫真ハ學界ノ至珍トシテ難有文庫ニ頂戴可仕 小生ヨリモ 篤ク御礼申上候 御注文ノ敦煌發見品ノ焼増モ取カ、リ居候間 幾口カニ分ケテ出来ノ分ヨリ順次御左右ニ御送可申候 文庫藏 華夷譯語一部二百金位ニテ複製仕度計畫ヲ立テヲリ候ガ御希望如何ニ候卦 尤モ一人ニテモ御申込多ケレバ多キ程安クナルコト、御座候 殘餘後便ニテ色、申上度候ヘドモ不取敢御禮ヲ兼ね要件ノミ寸楮如斯ニ候

四月十五日 石田幹之助 頓首

石濱老臺 侍曹

石濱文庫所収書簡資料に見る明治三十九年～昭和三〇年代の漢学

7 昭和十四年九月二十九日 1607 封書・黒野便箋五枚

拝復 芳墨難有拝誦、文祉益々御嘉祥大慶ニ存じます。

アルタン・トプチの訳本は早速外務省調査部へ某友人よりの希望として是非譲ってくれるやう頼んでおきました。殘部さへあれば多分寄贈してくれること、存じます。私のところ迄送るやうに云つておきましたから来ましたら御轉送申上ます。

さて毎度のことながら小生こそ心ならずも御無沙汰を申上て申訳ありません。何だかあとからあとからつまらぬ事が続出して来て それにひっかかり、そこへ物覚えが大いに悪くなり 朝家を出る時今日はこれ／＼の事をと考へ乍らトント忘れてしまふやうな次第で、初夏の交、特に御惠貺あづかりました創元社新刊の内藤先生近世文学史⁽⁸⁾論もつひ御礼を申さずじまひてこれは忘れてゐるのだけ尔氣が咎めて仕方がないのですが 要するに疏懶の致すところ 今日迄失礼に打過ぎましたこと何卒御海容を願ひます。御校字の御骨折は一方ならぬことだつたと思ひます。 小生 は原版も一本藏してゐますが形も手頃で印刷もはつきりした今度の版は大へん結構でした。篤ク御礼申上ます。

「此頃はさっぱり駄目だ」など、は誰か外の人のことのやうに存ぜられます。京大の講義も益々佳境尔入られたことと存じます。燉煌のことを有山房の文庫(?)に書かれる由、前の懷徳堂での御話しのやうなものですか。早く拝見し度いものです。松岡君のは仁井田君が何にも事情を知られることなしに推測してをられた

通り実は小生が材料を提供したのですが彼氏も中々あゝいふものを始めから読んでをり下地はあつたのです。たゞ直接の動機はフレミングの旅行記あたりにあつたようです。「燉煌石室の遺書」のうちには豫告して頂いた小生の西域古学ビブリオグラフィは近頃少々後援してくれる人あり、愈々本気にやらねばならないこととなり、弱つてゐます。(当分は本職に努めなければならぬのでこゝ半年位はとてもダメさうですが)。幸に近刊の「書香」に桝沼氏の尽力で新疆書目といふやうなものが連載⁹され大いに参考になります。それは実はビブリオグラフィだけですまされぬことになりさうで一層弱つてゐます。愈々となれば一に大兄の御厄介尔ならなければならぬと存じますが、その際は是非御垂教のほどを特に御願申上ます。(七月かの「蒙古」に小生名義のつまらぬものが出ましたが、新しいことをつけ加へることが出来ず、古い「東洋史講座」のやきなほして何とも御恥しく、わざとこれは御目にかけません)。

それからこの前例の愚著につき何これとなく御親切な御高示を頂きまして難有う御座いました。それも忘れてゐるわけではありませんが、今日は／＼と思つてゐるうちに御手紙がどこかへまぎれ込んでしまひ、それも今日まで失礼してしまひました。あれは全く小生の失檢と存じます。謹で教を奉じますがもう一度御手紙拝見しなほして改めて御礼を申度いと思ひます。

最後にこの前御目にかゝりました時、「方氏墨苑」に見えた女眞

字のことを御話しましたが、その時、だれかあれをいぢくった人があるやうだと承つたやうに覺えます。それで色々さがしましたがどうも見当りません。ラクペリにもワイリーにもないやうです。事によつたらドヴェリアの四訳館考¹⁰かとも思ひますがこれは無精をしてまだあの東洋文庫のを見に行きません。何か御心あたりがありましたら是非御教へを願ひ度いと存じます。もう校正摺が出てしまつてゐるので先人の研究があつたとしても今更どうもならないのですが、氣になりますので御高教を乞ふ次第です。

とりあへず御返事まで、急に涼しくなりましたが、御自愛を祈ります。

幹之助頓首

九月二十九日

石濱先生 撰安

8 昭和十四年十月二日 二〇二 封書・黒野便箋四枚

拝啓 外務省カラ早速アルタントプチの譯本ヲ二部送ツテクレマシタラ別便ニテ御轉送申上マス。ドウカ不然御頒チヲ願マス。小生ハ小林君ニ頼ンダワケデハアリマセンガ ヤハリ小林君カラ手紙ヲツケテ送ツテクレマシタノデ コレハ専ラ同君ノ尽力ノ結果ト思ハレマスノデ本ヲ御請求ノ方カラ直接ニ外務省調査部第三課内同君宛ニ手紙ヲ一本出シテ下サルヤウ御傳ヘヲ御願ヒ致シマス。小林君目下蒙文秘書ノローマ字訳ト國文新訳トヲ頻リニヤツテ

井マス、ソレニ関シ貴著蒙古藝文襍録ヲ大ヘン讀ミタガツテ井マスガ大阪ニハ東亞研究ノ古イ部分ノ手ニ入ルトコロハアリマセンカ。東京ハアリサウナ処ニ皆ナクアノ會員ノ重ナ人多チガサツパリ持ツテ井ナイノニ驚キマス、尤モ燈台下暗シデ案外東大ノ図書館ナドニアルカモ知レズ、ナホ一応探シテ上ゲタイト思ヒマスガ何カ耳ヨリノ御話ガアリマシタラ御知ラセ願ヒタイモノデス。

昨日岩村忍君ニ会ヒコノ夏ノ支那學術機關ノ視察談ヲキ、マシタ。ソノ際同君の新著「十三世紀ニ於ケル東西交通史序説」ト申スモノヲ貰ヒマシタ。太イニ結構デアリマス。引ヒテ井ルモノモ大体本筋ノモノバカリデ中々ヨク勉強シテアリマスガ日本ノ方ノ書物ヤ論文ガモウ少シ引カレテモイ、カト思ヒマス

幹之助 頓首

十月二日

石濱先生 案下

「言語研究」第三号昨日入手、服部君の長篇と野村氏のヘーニッシの元秘史譯アリ コレカラ勉強ノ上コレモ御説ヲ伺ヒタイモノデス

【考察】

石濱純太郎は『東洋史研究』四卷四・五号に「邦譯アルタン・トプチ（蒙古年代記）」について 外務省調査部第三課發行（蒙疆專號）を寄稿し、原文校訂の初版本未使用の不備、訳注の誤りなどを詳細に指摘している。ただ、『東洋史研究』四卷四・五号の發行

年は昭和十四年六月三十日となっており、書信の内容と照らすと石田幹之助から転送される前に書かれたことになり矛盾が生じる。或いは別途先に入手していたものか。

9 昭和十五年十一月十一日 1607 封書・巻紙

拝呈 漢學會大會之節ハ久々アルて拝芝色々高教ヲ辱ウシ厚ク御礼申上マス 折角會ニ御列席のところを御邪魔してしまひ申譯ありません

偕只今ハ御新著「富永仲基」一部特ニ御惠贈ヲ賜ワリ正ニ拝收毎々ノ御厚賜感謝ニ堪へません、御出刊を鶴首して待つてをりましたところ実ハ數日前東京ノ創元社ヨリも一本を寄贈しまゐり早速拝見即日卒業、今更乍ラ謙齋先生ノ學術ニ敬服ノ心を新二しました。今迄度々御写の御發表ヲ拝見して来てをりましたがそれにしてもよくあれだけ材料を御集め二なったとこれも只管敬服ニ堪へません。御叙述ハ隅から隅まで行届いて誠ニ至れり尽せりと存じます。せいゝ友人や學生ニモ拝讀させるやうにし度いと存じます。甚だ意を尽しませんが不取敢茲ニ御礼まで申述べます。

拝具

十一月十一日

幹之助

石濱先生 侍曹

餘計なことであつたかも知れませんが創元社より一本を姉崎博

士へ御送りするやう申しましたら早速送ってくれた左うで先生も非常二喜んでをられました。

10 昭和十六年一月十四日夕 1602 封書・原稿用紙五枚

拝啓、昨日玉稿書留便ルて御返送申上げました。既ル御落掌下さった事と存じます。さて御参考までにこの前申上げたアブルガージの未刊仏訳本及び葡訳刊本のことにつきブリューネの記事を逡写して御目にかけようと只今この残をのべて本を出して来たのですが、驚いたことには^{小生}飛んだ間違をしてゐたのに気づきました。御原稿の内覧を許して頂いたので幸に御迷惑をかけずにすむことにもなり^{小生}の粗漏も白日の下に出ずにすむことになりましたが老耄の徴候歴然たるものあるに且つあきれ且つ驚きをることゝ御座います。この点^{小生}の早合點を深くお詫びし人騒がせをいたしましたことを偏に御勘弁願ひます。

間違のいきなりは Abulghasi... の項の次の Abul-Hassan-Ali-ben-Abdallah の Annales regum Mauritanie... 云々の本の解説を上の方の続きだと思つてしまつたのです。随分細い字でクシャ／＼書いてあるので間違ひ易いと云へば易いのですが著者名は少し大きく而もキャピタルで印刷されてゐるのですから未だ／＼この年では間違ひをする筈はなさ／＼うなのですがや／＼ぱり年のせいなのでせう。石浜先生にては決して年などを顧慮されず益々アンビンアスにやつていただきたいのですがもう小生などは年相当のこ

とで満足する方がよさそうです。

その代りおわびだけですものも餘り曲のないことですから序にクラブロートのカウカスス紀行のことをブリューネから抄出して御参考に供します。それは東洋文庫に仏訳の端本があつたかと思ひますが(白鳥先生が往年ドイツの本屋から内容かまはずアジア関係書の棚を棚ぐるみ同様に買込まれた時のものらしいのですが)殆ど記憶もなく、外には原本も仏訳も英訳も何も見たことがありません。それでブリューネにどんな誤なり不備なりがあるか全くわかりませんがともかく何かの御参考になるかもしれません。

Brunet, J.-Ch.⁽¹⁷⁾

Manuel du libraire et de l'amateur de livres... Tome

Troisième. Paris/ Dorbon-Ainé, 19 Boulevard Haussmann

19. [s.d.] (小生ノ使ッタノハ Leipzig の J.A. Brockhaus

の "Helioplandruck" といふ版ですがそれは無論原本と同一⁽¹⁸⁾ デスカラ原本トノ異ヒハナイモノトシテオキマス)

コノ第三卷⁽¹⁹⁾ col. 672 11

— REISE in den Kaukasus und nach Georgien

in 1807 und 1808. Halle, Waisenh., 1812-14.

2 vol. in-8., avec 2 planch. et 3 cartes. ⁽²⁰⁾Kaukas-

Sprachen, Anhang zur Reise, etc. Ibid., 1814, in 8

(原文ノ通り。 — ハ Halic)

とあり、二冊の外に Kaukasus-Sprachen 云々といふのがまた別に

あるやに思はれますので、誠に右の項の最後に加へた〔20592〕と
いう数字をたゞい Tome Sixième の附表の部 (Table méthodique,
notice des journaux) の col. 1087 の No. 20592 を訂正す

REISE in den Kaukasus und Georgia, von J.

Klaproth, Berlin, 1812-14, 3 vol. in-8

とあつて明かに三冊と記してあります。ただ表題のゲオルギエン
がゲオルギアとなり、その前にあつた nach が消えてゐます。

次に前へ戻つて第三巻の同じ欄に前書の次の頁に

—VOYAGES au mont Caucase et en Géorgie, Paris,

Ch.Gosselin, 1823, 2 vol. in-8, avec une carte

とあり、仏訳のことがあります。これにつけて次にかういふ注
記があります。

L'auteur a élagué de cette traduction française tout ce
qui tient aux recherches purement historiques, ainsi que
le 3^e vol. de l'édition allemande; mais il l'a augmentée
de la Description du Caucase oriental, qu'il avait d'abord
publiée séparément en langue allemande, sous le titre de
Geographische und historische Beschreibung des östl.
Kaukasus, etc. Weimar, 1814, in-8. Il a donné depuis:
TABLEAU historique, géographique, ethnogr. et polit. du
Caucase et des provinces limitrophes entre la Russie et la
Perse. Paris, Ponthieu, 1827, in-8. [28050]

Il y a des exemplaires de ces deux ouvrages en pap. Vélin.

その右の 28050 の Tome VI の col. 1587 に就いて檢しますと、上
記 TABLEAU historique, ... の Caucase を切つて以下を略し、
パリ、一八二七年刊、頁 8 と書き、發行書肆の名を省いてありま
す。このタブロー・イストリク云々の書も未だ見たことがありま
せん。(右の ces deux ouvrages とあるのはどれとどれでせうか、
紀行の仏訳とタブロー・イストリクとのこと、は思ひますが)。

こんなことは遺書目録でとうに御分りのことかと思ひますが、
今遺書目録は手許で見る便宜を持ちませんので六菖十菊とは思ひ
ますがともかく書いて御目にかける次第です。

新年早々とお騒がせをして誠に申わけありません。どうか
御原稿のうちから小生の御知らせした件のことだけ御削除を御願
申上ます。

先は右御わび旁御知らせまで、勿々拝具

一月十四日夕

幹之助拝

石濱先生
侍史

11 昭和十六年十月二十六日 1599 封書・茶野便箋三枚

拝呈 過日は大阪で御講演の欧米の支那研究に関する御話の筆記
一部御惠贈を頂き正に拝受ありがたく御礼を申上ます。たいへん
有益に一氣に拝読いたしました。

京都で支那學大會をおやりの由、龍谷の方からも御案内を受けました。ぜひ上りたいのですが十一月初めは東京にも何かと學會があり、一寸むつかしく思はれます。十一月末にでもなりましたら一つ憤發して京都へ行って見ようかと考へてゐます。

創元社がまた何か御注進をしてしまったかも知れませんが、今欧米の支那研究乃至支那學者といったやうな通俗ものを集めて一冊にするとか云ひ、煽てられて古雑誌をいろ／＼つぎはぎしてゐますが、「東亜」なんていふものが手許には勿論、本家本元の東亜經濟調查局にもないので大困りをしました。今読み返して見ると冷汗三斗ものでトモいやになります、何とか辻褄をあはせることにしてゐます。どうせ大壺先生の槍玉に上るシロモノばかりですが出来ましたらともかく一本はお目にかけます。出来上りは来春になりませう。

先日羽田先生とも色々お話しした事ですが「都利聿斯經」なるもの、逸文を少々見つけました。いづれ申上ますが既に何かお気づきでしたら御高示に預りたいものです。先は右御礼まで申上ります。

幹之助頓首

石濱先生 侍史

【考察】

『都利聿斯經』については『新唐書 藝文志三』に「二卷、貞元中、都利術士李彌乾、傳自西天竺、有璩公者譯其文。」とあるが佚書となっている。後に石田幹之助は「都利聿斯經とその佚文」¹⁴を

発表するが、その佚文発見の情報がこの書信に見えている。

12 昭和十七年二月十四日 1919 封書・茶野便箋七枚

拝呈 久しくご無沙(汰)してをります。相変わらず御元氣の事と存じます。^{小生}も幸ひ風(邪)もひかずどうにか動いてゐます。

朝日の朝刊に連載されてゐる藤沢恒夫君の「新雪」は^{小生}愛読してゐます。さすが大壺先生の息がかゝつてゐる点争はれぬものがあり、我党關係の字句がしば／＼出てくるので大いに愉快を感じてゐます。東洋學者が出てくる小説が昭和の本に一つや二つあつてもいい、だらうと思つてゐた所ですから一層愛読してゐるわけです。東京の新進支那學者などはみな四角四面のマジメな先生方として小説などを読まれるかどうか知りませんが、変り種の仲間二三とは夙に藤沢君の続きものについてよく噂をしあつてゐます。その結論は湯川先生にも信夫君にも多分に石濱先生の分身がひそんでゐるようだというのですがどうもその点は争へぬやうに思はれます。藤沢君に頼んで老先生と信夫君とを存分に活躍させたいものです。出来れば信夫君あたりの口からオッセンドフスキなどをたゝきつけさせて蓑和田先生の向ふを張らせたいやうに思ひます。オッセンドフスキーと云へば只今「泊園」¹⁵の正月号を頂戴して拝見したことです。生活社がまだあんなものを出してゐることを始めて知りました。毎月「東亜問題」とかいふ広告雑誌をくれませんがこの三四号は忙しいので封も切らずあるので知りませんでし

た。湯川先生の登場甚だ結構です。どうか毎月大壺先生一人二役で御忙しいでせうが一つ御奮闘下さるやう御願ひします。服部君の學士院での講演筆記はとても有益でした。蒙古・滿洲にも及んで貰へたらと望蜀の念に堪へません。服部君のやうにゑらくなつてしまふと専門的なものは^{小生}などには猫に小判でさっぱり分りませんが、あの程度のものだとよく分かり従つて有益というといふことになります。トルコ諸部族の名称の変化などかなり新知識でした。野村君も「言語研究」などで大いに活動のやうで我が蒙古學などもこれより本格的になること、楽しみ且つ心づよく感じてゐます。

「泊園」の論説も大いに御同感です。大東亜戦争勿論結構ですが対支問題あつての大東亜戦争なのに此頃支那のことがトント忘れられ勝ちなのは遺憾に堪へません。また「中國文學」などが何かしきりにわい／＼云つて「漢學」がどうの「支那學」がどうのと云つてゐるやうですが問題は形式や名称ではなく、編者自身の知識の内容が第一です。倉石先生の議論も專家に対するお叱りとしてなら一応承つておきますが、今敵前渡河を目の前にして木橋にするか鉄橋にするかの議論などをしてゐる時期ではないでせう。泳いで渡るといふ手さへ打つたではありませんか。何でも良いから本当の支那と支那人といふものを日本人に承知させることが最大の急務ではないでせうか。返り点をつけて読んだつて書経でも論語でも立派に分かるではありませんか。支那語でお読みなな

た所で云つてゐる所がみなほんとうと思つて支那人に舌を出されるやうでは何にもならぬと思ひます。

此頃は辞典の仕事が中止になつて大いに暇になるべき筈ですが中々さう行かないので困ります。振興會へは週に二度、二三時間づゝ行くだけですが何かと色々な方面から引っぱり出されてもう廢品に近いものをあまり使ふなどいふのですが、此際だから廢品大いによろしい、再生してやらうなど、いふ手合が出てくるので困ります。勿論物も人も不足の際色々の不便は覺悟の前ですが家庭の手不足は影響テキメンにて時々ドメスティックな事まで手傳はねばならず、正月初旬から三週間兵隊サンの御宿を仰つかった間などは少々閉口しました。然しうちは女の子ばかりで戦線でお役に立つものは一人もないのですからその位は仕方ありません。昨年末加藤繁先生の還暦祝賀論集が出来ました。^{拙論}一章も加はつてをりますので御覧に入りたいと存じながら未だ別刷が出来ず、そのまゝになつてゐます。但しこれは集中の最劣作と自認してをりますので少々御目にかけ悪いものではありませんが出来ましたら左右に拝呈したいと考へてをります。

さて突飛な話ですがLindley (Lind) の「大平天國」といふ本について何か論評をしたものを御承知ないでせうか。どうも寡聞にしてさっぱり review を知りません。実はある若い友人が滿鉄の良書翻訳會とやらから頼まれてあれを訳出してゐるといふので序文を書いてくれと頼まれたのです。^{小生}は君そんなものを訳してど

うするんだ、あれは偽書として有名なものではないか」と云ったのですがその根拠が少々怪しく、和田清先生なども常々あれは二セモノだと云ってをられたのを味方にしてゐる位で甚だ心もなない次第です。勿論序文執筆のことは断つてあるのですが、偽書なら偽書でいいからそんな次第を書いてくれといふのです。それは少々驚いた話で、役に立たぬ本なら訳出することも徒勞ならば出すことも無益と思ふのですが滿更棄てたものでもない本でせうか。何か今迄あれは駄目だといふようなことを云った人があったら御教へを願ひたいものと存じます。(決して急ぎません。御序の時で結構です)。

大へんご無沙汰いたしましたま、一寸たづね旁、伺ひを立てる次第です。春寒なほ料峭、幾重二も御自愛のほどを祈上ます。(救堂先生も相変らず元氣、この頃の商賣以外にも市民公共の為色々の役をしいこまれ大活躍で、文求大学の講筵にはほゞ毎週一回出席を心がけてゐます。)¹⁷⁾

二月十四日

幹之助頓首

石濱先生 史席

【考察】

「新雪」は藤澤桓夫の朝日新聞連載小説であり昭和十六年十一月二十四日から昭和十七年四月二十八日まで一五四回連載された。主人公の国民学校教師簀和田良太をめぐる隣組の眼科の女医片山千代と恩師湯川丈亮の娘保子の恋愛模様を描いた作品である。恩

師湯川丈亮は東洋言語学者であり、その教え子で満洲から父の病状のためにいったん帰国しているのが正木信夫である。この書信はまだ連載途中に結末を知らないまま書かれたものである。我党¹⁸⁾びいきとしては、主人公簀和田よりも正木を応援したくあるのは当然であろう。

オッセンドフスキについては、「泊園」の正月号に湯川丈亮の名前を借りた石濱純太郎の「新雪庵漫筆」を掲載するが、その冒頭数行を引くと、「大壺君は既にオッセンドフスキの「動物人神々」は眞實なる記録ではなく、たゞ面白い冒険小説だと指摘して、彼の他の書もさう取扱へと注意してゐたが、「動物人神々」は改裝重刊されても神近女史は何等そんな事には氣がつかぬらしい。おまけに同じ生活社から「アジアの人と神秘」が大久保忠利氏の譯で出版され、……」とあり、自分自身を第三者にして第三者の口から批判文を寄せている。石濱は夙に「オッセンドフスキー」(『宗教と藝術』第十八卷第二・三号 昭和十三年)の論考を発表しており、すでに四年間の長きを経るも旧態然としてゐる出版界へ痛烈な批判を放ったものである。

さらに「新雪庵漫筆」に「服部四郎さんの「現代語の研究と土耳古諸方言」を読んだが、轉た感慨に堪えなかつたわしも東洋言語學に意を注いだのであつたが我國も東洋言語學をホントウに持つ様になつたと嬉しい。(中略)モウ我國で外國にも負けない東洋言語學を見られる様になつたのは喜ばしい次第だ。服部さんや野

村さんの論文を読む度に「気が強くなる」と続けているのを受けて石田幹之助の書簡でも服部君や野村君の話題へと移っている。また「泊園」の論説」というのは同紙の白水生の「大東亞戦争と漢學」を指す。

湯川丈亮仮託の文章は「泊園」第五六號にも湯川丈亮翁談・正木信夫筆録として「新雪庵夜話」も見える。

13 昭和十七年五月三日 1604 封書・茶野便箋三枚

拝復、こちらこそ勝手な時ばかり御面倒をかけはなしで何とも申わけありません。この前は何か愚問を提出して湯川先生にまでお手数を煩はしました由、恐縮至極に存じます。

さて今日御申越の件は一つ早速手をまはして見ませう。小生もそんな噂をきいてゐましたがまだ迂闊にして出たかどうか知らずにゐました。あすこは研究所報とかいふ厚い雑誌を出る度にくれますが外の特珠の報告や単行本的な出版物はさっぱりくれません。尤もこちらにも甚だ不勉強で向ふでは時々遊びに寄れといってくれるのですが毎日のように前を通り乍らいつも素通りで失敬ばかりしてゐるからかも知れません。幸に理事に知りあひの人がありますから一つ談じこんでモノにして見ませう。御希望に便乗して小生も一本分捕ることにしたいものです。吉左右はいづれ御知らせ申ます。あすこはホントの御上ではないのですが、まあ大体御役所式のやうで我々野人にはやはり敷居が高いやうに思はれます。金はか

なり沢山あるやうですが、人がなく、仕事の種類ややり方にも相当意見があります。

文部省の属下に又民族研究所とかいふものが出来るそうですが、聞いて見れば豫算がタツタ十萬円位との事、大學に出来た東洋文化研究所といふものも同じく十萬ばかりの予算ださうですがそんな事で何が出来ませう。みんなオモチャのやうなものばかりで仕方がありません。この際もつと遠大な計畫の下に東洋文庫などを一図書室とした位のドエライ研究所を作り、大いに活躍させたいものです。そんなものが出来たら一つ大壺先生も湯川先生でも引っぱり出して正木君などを助手に引きつれてやって来て頂きたいものですな。

日洪文化へ御出しになったチョーマ先生の傳は幸に會の方から貰つてゐますので拝見いたしました。前に頂いた関大(?)の新聞に出たのより詳しく大いに益を得ました。大壺先生でなければ出来ないあゝ、いふ先生たちの學績紹介を是非つゞいて御願ひしたいものです。

四月一日(ホントは三月三十日)⁽²⁰⁾ 白鳥先生⁽²¹⁾遂に道山に帰られ、誠に痛恨にたへません。及門の弟子一同限りなくガツカリしてをります。去る廿八日雜司ヶ谷の墓地に埋骨の式も滞りなくすみ、いつのまにか一ト月たつてしまひました。チト勉強にとりかゝりたいと思ひます。先は御返事旁々、筆硯御雄健を祈ります。

五月三日

幹之助
拝

石濱先生 侍史

14 昭和十七年八月五日 1608

封書・変野便箋四枚（葉山かぎや旅館から）

拝啓 十数日来特別暑いやうに存じますが貴地は如何ですか。大へん御無沙汰をして申わけありません。

先日は五所監督を御紹介にあづかり六月の何日かに同氏以下同勢五名ばかりの訪問に接しました。書斎をのぞかせるといふ強要にあひ大いに閉口いたしました。事実貧弱且つ大乱脈なところ覆ふべくもなく、ありのまゝを見せましたが嘸ぞ呆れられたこと、存じます。とう／＼二階の別室まで（これは所謂書斎使用不能ニ付代用品として充当中のもの）臨検をうけました。恐らく何の参考にもならなかったでせう。何でも進行に伴ひ小道具を心配せよとのことでウラジミルツオフやポツペの本を貸せとか、正木君が料理屋の女中に書いてやる蒙古文字のいたづら書きを墨で書いてくれる人を世話してくれとか、そんなことが主なことでした。できることなら何でもしてあげますと云っておきましたがその後誰も見えません。それから重ねての御葉書で「新雪」新版の題簽を書けとの藤沢君よりの御希望でしたが、これも今更御頼みしたところで勘弁して下さりさうもありませんから書くことにしてゐますが新潮社からはまだ何とも云って来ません。

数日前創元社をして最近出刊の愚著一部⁽²⁾拝呈方手配いたすやう

四四

申付ておきました。が御笑納御高批を仰ぎます。たゞ御覧の通りのもの、また序文に断りましたやうなもの、萬々お手やはらかに願ひます。書きかへたいこと、改めたい事が山のやうにあり、控へもあるのですがすべてが面倒くさく、それに本屋の催促も急なのであんなものしか御目にかけられませんでした。幸ひ平生の御教示により大分誤を正し得たことだけは大いにありがたく思つてをります。（生活社から小生「監訳」とかもの／＼しい添がきかついて出ました支那文化論叢と申すものは怪しいものでお目にかける勇氣がありませんが、御覧下さるならば一部お送りしてもよろしう御座います。若い人の翻訳といふものはどうしても氣に入らないのですが、人のことより自分のものもいゝ、かげんなもので、なんだか意味の十分通らない処があるやうですが一切原文の不徹底に罪をきせて大きな顔をしてゐる次第です。）

先日文部省に大東亜史論編纂の擧があり、何か並び大名の一人として引っぱり出されましたが、その席上久々にて武内義雄先生二お目二かゝり、大壺先生の御噂なども出しました。（この大東亜史と申すものは極めてヘンテコなものにて何か協力せよといはれても何とも嘴の出しやうもないものと思はれます。席上矢野先生など大いに当局にくつてかゝつてをられたやうですが恐らく無効なこととせう。子供のもりをしながら一日から当地に来てゐますが一昨夜近年稀な雷雨があり、尔来漸く涼しくなりましたがそれまでは東京同様中々暑く、徒に晝寝をするか、朝夕散歩をして人の別荘を羨んでゐ

る位で何にも出来ません。二三日帰京してまた来る積りですが一寸暑中御見舞少々書物の御案内まで申上ます。御健康を祈上ます。

八月五日

葉山 尔て

幹之助 頓首

石濱先生
侍史

【考察】

藤澤桓夫「新雪」は五所平之助監督により映画化され昭和十七年十月一日に公開されたが、これに先立って石田幹之助宅訪問の目的は映画撮影の参考に資するものだったと推察される。先の書信でもたびたび言及しているようにお気に入りの作品の映画化とあって、迷惑顔をしつつも多少期待と嬉しさが行間からにじみ出ているように感じられる。確かに映画では正木君が料理屋の女中に蒙古文字のいたづら書きを書いてやる場面があるが、結局誰の手になったのであろうか、気になるところである。

15 昭和十八年五月二十二日 1606 封書・黒野便箋五枚

拝啓 先日御門下白木君が出てきまして色々ご近状をうかがひました。益々御勇健の由、大慶に存じます。御口添へのありました件、一通りのことだけは致し幸二白木君も喜んでくれましたが、何分応募者も多く、第一次の學科試験だけハパスしたのですが、最後の詮衡に漏れたのは誠に残念でした。

先日頂戴いたしました御本は略々卒業いたしました。色々鴻益

をうけました。重ねて御礼申上ます。東京でも近頃大分評判が高く、学生なども随分拝見してゐるようです。「この石田杜村^②といふのはどういふ人です」など、^{ママ}私のところへ来てきく男があるには恐縮してゐます。「東洋学の話」の次は服部四郎先生の「蒙古とその國語」を読んでゐます。それも中々有益ですが門外漢としてそれでもむつかし過ぎる所があります。先生も学位を得られた由、お目出度いことです。

さて一つ御願ひあり。御紹介申上る人に是非御寸暇御割愛御引見を願ひたいのです。それは滿鉄の「北滿經濟研究所」長、兼ハルビン図書館長をしてゐる岡川榮藏君でありますが、この人は京大農学部出身の農学士で今迄専ら開拓事業の指導の方に携はつてゐたさうですが近頃次は役目の關係から色々さういふ方向の事業を志してをられ、中々熱意を以て事を進めてをられるのですが、その所属のハルビン圖書館には御承知と存じますが北滿鐵道接収の際一緒に引継いだ露文々籍が数万冊あり、東洋關係書も五千冊位あるとの事です（目録は正統二冊出刊、岡川氏に御請求下されば差上ること、存じます）、これを中心として今般有益なものを翻訳翻印などして広い意味での東亞研究に役立てたいと念じ之を主旨とする會を社内に行き實行に著手すると共にこの文籍を在滿同胞及び滿洲國の上層部に十分認識させたいのださうで私も色々話をき、大へんい、事だと思ひました。それに就き同君目下上京中で、来月一、二、三の三日間京都又ハ大阪へ出張するに

方り、是非大兄に拝眉 色々御力添へを願ひたいとのことで紹介方を申出でられました。御迷惑かとも存じますが、又御役に立つこともあらうと存じまして一つ御願ひをする次第です。翻印翻訳すべき書物の選定や、訳出者の推薦、監督、もしくは東京と京阪に一二人の専家を御願ひしておきたいといふやうな希望ですし、六月末にハルビンで露文東洋学書の價值を世に紹介する二三會合もあるさうで出来れば滿鉄の賓客としてそれへ御出馬を願ひたいといふのです。ともかく一つ御引見の程を願ひたいのですが六月の初め三日の間に京都又は大阪へお出かけの日は御座いますまいか、なければ御宅へ拝趨も辞せずと申してをりますが、小生迄御都合を御漏らし願へば至幸ニ存じます。京大、龍大、関大、その他どちらでも御指定の処へ罷出てたいとの事で御座います。今日は右御願ひの件のみに止めておきますが此上とも御康安のほどを御祈り申上ます。

拝具

五月二十二日

幹之助
頼音

石濱先生

侍曹

16 昭和十八年六月三日 1904 封書・紅野便箋五枚

拝復 岡川氏ノコトニ就キマシテハ大ヘン御迷惑ヲカケマシタ 申譯アリマセン。同君ハ 小生モ渡滿疑ナシト勝手ニキメテ説得ニ来ラレタニハ閉口シマシタ。 小生モ事情ガユルセバ行キタクモアリマス

ガ東京ト云フ処ハ中々サウハ参ラヌトコロデ色々ナ關係筋ガドレモコレモ自由ニシテクレマセンカラ駄目デス 大兄モ無論難カシイドラウトハ岡川氏ニヨク申シテオイタノデスガトモカク御願シテ見ルト云フノデ御紹介申シタ次第デス。御多用中ヲ御都合下サイマシタコトヲ厚ク御礼申上マス

サテ御芳書ヲ頂イテスグ御挨拶ヲ申上グベキデシタガ少々腹ヲコハシマシタ處ヘ急ニ公私ノ急件続出一時夜ハ徹夜ヲスルヤウナ次第デツヒ失礼ニ打過ギ只今重ネテ御葉書ヲ頂イタ始末デ御無礼ノ段平ニ御海容ヲ願上マス。御懇諭之兩三條誠ニ難有捧読致シマシタ。イツモ滄ヲザル御厚志衷心ヨリ御礼申上マス。バラディウスの蒙古紀行ノ所載誌名ハ誤記デシタ。今度改メマセウ。舊稿作製ノ時ノノートが間違ッテ井タモノト見エマス。北京正教會ノ紀要犯譯モノートニ一冊ツヅ1908ト書イテオイタノヲ一方ガ32ニ見エタ寫シ誤リデシタ。上梓ノ時モウ一度タシカナ著録ニ当タリテ見ルベキダツタデセウ。コレモ折ヲ見テナホシマス。ドウモ間違バカリデ困リマス。マダ沢山アリマセウカラ御叱正ヲ願ヒマス。(例ニヨリ外ニハ誰モ教ヘテクレル人ガアリマセンカラ)、アノ南海關係支那史料ノ話ナド、一場ノ漫談ノ筆記ト云ツテシマヘバソレ迄デスガ、昨秋東北大デ講義ヲスルノニ少々深入リヲシテ見マシタラ、イカン簡單ニスルトハ云ヒ條モット正確ニ、又モット盛り込ンダモノガ書ケタラウト自分乍ラ呆レテ井マス。シユミットノ蒙古源流ニ二版アルラシイトノ御話、一つシラベ

テ見マセウ、^{小生}アノ本ハ持つテ井マセンカラドコカ持つテ井ル所へ行ツタ時一檢致シマス。佐口君が先日ノ論文中ニ何カソレニ觸レテ井タカト思ヒマスガ此頃特ニ忘ツポイノデ錯覺カモ知レマセン。方々カラ毎日ノヤウニ本ヲ頂イテ誠ニ難有イコトデスガ一面拝見シナケレバナラズ（又シタイノデ）悲鳴ヲ挙ゲテ井マス。金関君ノ「胡人ノ臭ひ」²⁴、岩村君訳ノ「ウォンダリングレーキ」²⁵、「日葡交通」ノ第二輯、昨晚ハ吉川先生ノ元曲ノ訳注ガ到来、弱ッテイマス。羽田先生ヘノ祝賀論文手ヲツケマシタガ数日ノ猶予ヲ乞ヒタイト存ジマス。矢吹氏将来ノ于闐文殘簡ナド、私モソシナモノヲ御取次シタコトナドトント忘レテ井マシタ。認定ガ御出来ニナツタラ是非爭先拝見ヲシタイモノデス。又新、御本ガ出来ル由、コレモ鶴首シテヲリマス。

先ハ右甚ダ延引乍ラ御礼迄 イロ／＼取マゼ申上マス。時節柄御自愛ヲ祈上マス 拝具

六月三日

幹之助
頼首

石濱先生 史席

コレカラ東洋文庫ヘ梅原先生ノ講話ヲキ、ニ行キマス。メリケン痛撃ノ計畫ナド大ヒニ考ヘテ井マスガ中々名案ハアリマセンネ

17 昭和十八年八月十日 1905 封書・黒野便箋三枚

拝呈、毎日随分お暑いことですが益々御清邁の事と存上ます。

さて一昨日は御新葉「支那學論攷」一部特ニ御嘉錫を辱うし難

石濱文庫所収書簡資料に見る明治三十九年～昭和三〇年代の漢学

有拝受いたしました。毎々の御厚賜誠に感佩に堪へません。大抵ハその都度拝見して鴻益を得たものでいづれも思出深くりかへし拝読してをりますが、雑誌があちらこちらと散在してしまひ急に参考をしたいと思つても間にあひかねてゐたことの多い折から一冊におまとめ頂いたので何より難有いことです。かうなるともう無精をして改めて古い雑誌を見直す労を怠り思はぬ失敗をくりかへすやうなことはこれでなくなると存じ大へんに助かります。書後を拝見して大壺先生などがあんなことをいはれるとほんたうに剪劣菲才の末學^{小生}の如きは何と云つていゝ、か分からぬことになります。御弟子の方々が大方お手つだひをしてゐるやうですが、御弟子が沢山あつてまことに健羨にたへません。^{小生}も相かはらず創元社・生活社などから責められ、弱つてゐますが遅々として落稿の改造工事がすゝみません。そんなことよりこの大戦争がいったいどんなことに成るのかとその方が心配です。穴を掘つたり防空訓練・勤勞奉仕といふようなことも結構ですしやつてもゐますが根本のところがどんなことになつてゆくのですか。どうしてもいつか御話のあつたやうに何とか名案を考へて一刻も早くニューヨーク、ワシントンにバク彈の雨を降らせるより外に仕方がありません。岡川君の件ではゑらい御迷惑をかけましたが、あの先生は中々熱心で八月の末にするから来ないかと再三云つて来られますが、とても応ぜられません。お断りした理由が一つも解消してゐないからです。外にも上海に來いとか南京でおしやべりをしろとか色々

ウルサイ口がかゝりますが到底その任に堪へませんのでいづれも御馳走の喰ひ逃げをしてお断りをしてゐます。ハルビンの件は和田先生渡満を好機として（去る二月出發）そちらにお願いをした形になりました。

二週間ほど家族全部田舎へまゐり^{小生}一人留守番を仰付かつて籠城をしてゐますが、毎日友人学生がやってくるのと鄰組の組長さんの御役目中々や、こしいので閉口です。何も出来ません。

とりあへず御本頂戴の御礼を申上ます。酷暑の砌御大切二願ひます。美学の御令息は御元氣ですか、御健勝を祈ります。

幹之助
頓首

八月十日

石濱先生
侍史

18 昭和十九年十一月二十三日 1610 封書・青野便箋六枚

拝復 早速御たよりを賜はり、御丁寧な御言葉を頂いて恐れ入ります。久しぶりの御たよりで殊の外嬉しく拝見いたしました。が、デング熱に罹られ御入院御加養中だったとは初耳で少々驚きました。大阪はやっぱり第一線地域にいくらかでも近いと見え、^{小生}の姪がやはり大阪在勤中いつにか、った話を聞きました。然し必ずなほるものだといふことを経験者からきいてゐますが、人事不省になられることは少々入念な症状のやうですが其後の御様子はどうか、十分御療治の上全愈のほどを祈上げます。

東京にも京都にも若い人たちの間に一時デング熱ならぬデング病といふやうなものが流行ったやうでしたが、此頃は食ひ物が足りないせいとか皆あまり元気がないやうですね。然し民研の紀要だとか東大の東洋文化研究所の紀要だとか、あとからあとから色々なものが出て来ますが新進諸氏のアールバイトも中々大したものがある。この處老人（²⁶小生ももう五十四才の年が逝きかけてゐます）たちぐの体です。民研では岩村忍君の努力でシロコゴロフの未亡人から買込んで来た故人の Tungus-Russian Dictionary の原稿をそのまゝ、石印に附して出しました。下通りの浄書稿本を写真にしたものではありませんがやっぱり原稿には相違ないのでボズドネエフの蒙古文学史講義程度の見にくいものです。これは民族学協会宛に御身分御明記の上ハガキで簡単に御申込になると寄贈のはからひをするさうです。小生もこの手を教はり、古野君宛にハガキ一枚で定價四十円と申すものを一部セシメました。これは悪いことでありませんから敢て石濱先生に教唆する次第です。

西夏経の標題を御釈読御教示賜はりあつく御礼申上ます。^{小生}な²⁷ど西夏語に就いて語るばかりで語そのものはさっぱり分らず、羅氏や聶先生の²⁸本などもマルで勉強しないで華嚴経の題すら分らないとは我乍らアキレはてたことです。どうぞ十分お笑ひを願ひます。然し偽版の疑ありとの警報に接し大いに戒心の要を感じました。今度の出陳者は一人は大蔵省の御役人で集め始めた時にはトンコ―とは何のことかも知らなかった人ださうですし、もう一人も石

齋屋さんの番頭さんでこれは大壺先生の東洋学の話や^{小生}の愚文などを参考してゐると称し、大分勉強してゐるやうですがやつぱり素人なので如何はしいものも混つてゐるかも知れません。第三の人は全然知りません。天津在住の商人だといふことだけきゝました。然し先生の所謂敦煌病患者にはもうなつてゐる途中ですからせいゝ全快しないやうにしておく要はあります。見て貰ひたくて仕方のないことは三者全様で今度も大分自腹をきつて出陳の上、ドコから都合されたか菓子・コーヒー・弁当など色々喜捨してくれた上委員一同に盛宴を張ってくれたことなどは大いに感謝に堪へません。

東京も今月に入つてサイレンどころか敵機の姿を二三度見るやうな始末で、^{小生}等無防禦人種もカーキ色づくめに巻脚絆といふ出でたちで毎日出勤です。時に食ひ物の仕入れなどに近郊などにも出かけますが自然の風物は昔と何一つ変わりませんがどうもおちついてそのうちにしたる餘裕が足りなくなり勝ちです。それでも二三日前利根川の河口に近い知人の家に一泊し、早曉の美しい雲の色や、静に落ちて行く夕日の影などを心ゆくばかり眺めて來ました。強いて日々是好日をモットーして日を送りたいと念願し人にもさう云つてゐますが、顧みてまだホントウにその肚が出来てゐるかどうか甚だ怪しく、ドカンとバク弾が足下に破裂したらキツト仰天度を失ふ仲間の方でせう。それにしても昨今の買出し部隊の浅聞しさは見るにたへぬものがあり、時にその仲に入ることがあるかと思へば情ない限りです。寧ろ退いて徳を治むといふこ

とがほんとうに一層正しいことだと思ふやうになりました。友人、知人、学生などが親切に時々珍しいものを持つて來てくれるのを思ふと全く孔子様の教はホントだと考へます。(然し大して徳を治めてはゐません²⁸)

拵へかけの本はなまけてゐて中々はかどらず、一つはやつと二百五六十頁校正が出ましたがどうも途中でいや氣がさし、恥の上ぬりをするやうでやめたりしましたが本屋が許しません。正月には出來ませうが先生には隠すわけにはいきませんから結局は御叱正を仰ぐこと、します。豫め御手帳に願ふこととしておきます。何かつまらぬことを書きつけました。そのうち又何か領教の機を得たいと存じますがとりあへず御札旁、近況をお知らせ申上ます。御大患後、特に御加餐を祈上ます。 拜具 十一月二十三日

幹之助頓首

石濱先生

史席

まとめ

岡崎論文で欠けている書簡を補うことを主として、石田幹之助の書簡をざつと概観してきたのだが、特に印象深いのは戦中の学者たちの研究状況の實際を目の当たりにできたことである。

時に言語学への社会の冷遇に言及し、それに対する石濱純太郎および石田幹之助の東洋言語研究への熱情と云つたものを肉声を通じて感じることができた。

また、小説の人物に自身の考えを語らせるなどという高度な遊び心やそれに呼応して共感を示すという軽快な書信のやり取りをみて、戦時中という非常時にあるにもかかわらず、現代のわれわれよりも豊かな精神と余裕を見る思いがした。

石濱文庫には今回取り上げなかった史料に石田幹之助からの葉書資料がまとまって四〇枚所蔵されている。また、次の補足分と併せて稿を改めて紹介する予定である。

補足

さて、今回紙面の制約上掲載しきれなかった書簡を次に記す。戦後の都合六件である。

昭和二年三月十日 1612／昭和二年六月一日 1615／昭和二年六月十一日 1704／昭和二年三月七日 1706／昭和二年七月一日 1614／昭和三年八月四日 167
以上六件についてはネフスキー関連の言及などもあり戦後学会の一部の動静を知りうる史料でもあるので何れ稿を改めて紹介する予定である。

注

- (1) 二〇二〇年度関西大学研究拠点形成支援経費（課題名「内藤文庫および石濱文庫所蔵資料の調査と整理に関する共同研究」）のプロジェクトに採用され現在整理撮影を進行中である。
- (2) 「石濱・石田兩博士学術交流記録抄」(『古代文化』三五卷 1983.8 p.33-42)、「石濱・石田兩博士学術交流記録抄(続)」(名古屋学院大学論集『社会科学編第二〇巻 昭和五八年 p.9-30)
- (3) 石濱文庫クリアファイル整理番号
- (4) 新聞「泊園」はこの後毎月一回の発行となり、第二號が翌昭和三年

一月十五日発行なので、第二號を受け取った可能性もあるが、「御無沙汰申し上げて相すみません。……」という文面より、ほぼ第一號を受け取ったことへの返信とみて問題なからう。なお、新聞「泊園」は本学吾妻重二教授により東西学術研究所資料集刊二十九―三として全七八号(欠一号)が影印出版されており本稿の考察においても資する所大である。

- (5) 佐伯定胤(ささき じょういん、慶応三年六月二五日(1867年7月26日)～昭和二十七年(1952年)十一月二三日) 法隆寺百三世貫主(住職)を四〇年務める。
- (6) 原文赤括弧
- (7) 原文青括弧
- (8) 内藤湖南著『近世文学史論』創元社1939
- (9) 「書香」(南満州鉄道株式会社大連図書館発行)第115號(p.9-12)に燉煌文献抄録、同書第115號附録(p.1-6)に新疆文献綜覽(下)を掲載する。
- (10) 石田は後に「江(ハン)の「四訳館考」とドヴェリアの「四訳館史」と題して『ジブリア』(天理図書館報 = Biblia : bulletin of Tenri Central Library / 天理図書館 編)の通号1に論考を発表している(1949.01 p.3-17)
- (11) () 内は双行で記される。
- (12) Brunet, Jacques-Charles, 1780-1867.
- (13) 原文はドイツ語表記に併せて横書きで記される。
- (14) 『東洋史論叢 羽田博士頌壽記念』、東洋史研究會、一九五〇年、四九～六二頁
- (15) 原文は裏和田と書くつもりが竹冠のみ書いて途中のままになっている。
- (16) オッセンドフスキー(神近市子譯、1940『動物と人と神々…アジア脱出記』生活社、あるいはオッセンドフスキー(大久保忠利譯)、1941『アジアの人と神秘』生活社。
- (17) 原文()なし。()内は小字双行にて書かれる。

- (18) ここでは辞書にある対格の用法ではなく、我々の意味で使用しているものと思われる。
- (19) 新第五五號 昭和十七年一月三十一日発行
- (20) 原文()なし。()内は小字双行にて書かれる。
- (21) 白鳥庫吉 1865-1942
- (22) 『欧米に於ける支那研究』であろう。
- (23) 杜村は石田幹之助の号である。
- (24) 金関丈夫『胡人の匂ひ』東都書籍 1933
- (25) スウェン・ヘデイン(著) 岩村 忍、矢崎秀雄(訳)『彷徨へる湖』筑摩書房、1933年
- (26) 原文()なし。()内は小字双行にて書かれる。
- (27) 羅福菴、羅福成およびニコライ・ネフスキーの著作をいうものと思われる。
- (28) ()内は小字双行にて書かれる。

付記 本論は関西大学研究拠点形成支援経費(課題名「内藤文庫および石濱文庫所蔵資料の調査と整理に関する共同研究」)による成果の一部である。

石濱文庫整理番号	日付	岡崎論文ページ数・論考録文番号	備考
1464	昭和2年2月22日	1 34	
1467	昭和2年7月22日	一	
1465	昭和2年8月31日	1 34	
1515	昭和2年10月13日	1 34	
798	昭和3年1月21日	二	
1466	昭和3年4月2日	1 35	
1609	昭和3年6月1日	1 35	
1592	昭和3年6月15日	1 35	
1603	昭和3年7月18日	1 35	
1476	昭和3年8月6日	1 36	
1462	昭和3年9月1日	1 36	
1517	昭和4年2月19日	1 37	
1518	昭和4年2月26日	1 37	
2085	昭和4年5月2日 4月4日	1 37	岡崎による
	昭和4年9月5日	1 38	
	昭和6年1月30日	1 39	
	昭和6年11月10日	1 40 41	
1516	昭和8年3月24日	2 9	
1591	昭和9年4月25日	2 12	
	昭和9年11月10日	2 13	1706と同封
1593	昭和11年1月13日	2 15 17	
1598	昭和11年1月15日	三	
1596	昭和12年12月10日	四	
	昭和13年10月3日	2 18	
2246	昭和13年10月21日	五	
	昭和13年11月8日	2 18	
	昭和14年3月13日	2 18	
1600	昭和14年4月15日	六	
1707	昭和14年5月10日	2 19	

1597	昭和14年9月29日	七	内容による
1601	昭和14年10月2日	八	
1607	昭和15年10月8日	2 19	
1710	昭和15年11月11日	九	
1602	昭和15年12月9日	2 20	岡崎による
	昭和16年1月14日夕	十	
	昭和16年2月6日	2 22	1706に同封
	昭和16年2月16日	2 23	
1711	昭和16年9月8日	2 24	岡崎による
	昭和16年9月24日	2 25	
1599	昭和16年10月26日	十一	
1519	昭和17年2月14日	十二	
1604	昭和17年5月3日	十三	
	昭和17年5月25日	2 26	
1608	昭和17年8月5日	十四	内容による
1611	昭和18年5月6日	2 26	
1606	昭和18年5月22日	十五	
1594	昭和18年6月3日	十六	
1605	昭和18年8月10日	十七	
	昭和19年11月15日	2 28	
1610	昭和19年11月24日	十八	
	昭和20年2月15日	2 28	
	昭和20年3月8日	2 29	
1612	昭和22年3月10日		
1615	昭和23年6月1日		
1704	昭和24年6月21日		
1705	昭和26年3月7日		
1614	昭和27年7月15日		
167	昭和35年8月4日		

消印不明瞭で発送年が確認できなかったものは備考に根拠を記す。

Chinese Studies from 1890 to 1950s seen in letters in the Ishihama Bunko focusing on Mikinosuke Ishida's letters

GEN Yukiko

The purpose of this paper is to clarify the situation of Sinology studies from the Meiji era to the Showa era in Japan through letters addressed to Juntaro Ishihama, archived in the Ishihama Bunko, Osaka University. Until now, the letters stored in clear file cases have been broadly categorized, temporary numbers have been allocated, and the most significant items have been photographed. Now, I propose to focus on Mikinosuke Ishida's letters and prioritize all 18 unpublished letters that are missing from the already published letters and record the full text.

キーワード：石濱文庫 (Ishihama Bunko)、石濱純太郎 (Juntaro Ishihama)、石田幹之助 (Mikinosuke Ishida)、書簡 (letters)、漢学 (Chinese studies)